

フランス語の不定名詞句転位構文 -主題は「定」説再考-

東郷雄二

1 はじめに

話し言葉のフランス語に多く観察される構文に転位構文 (dislocation / détachement) がある。文の主語や目的語が文頭や文末に移動し、その跡に照応的代名詞が残される次のような構文である。

(1) Eh bien le président, il va démissionner bientôt.

(So, the president, he is going to resign soon.)

(さて、大統領はまもなく辞任することになる。))

(2) Tout le monde la connaît, cette histoire.

(Everybody knows it, that story.)

(みんな知っているよ、その話は。))

(1)は主語を文頭に分離した左方転位、(2)は目的語を文末に分離した右方転位の例である。転位構文においては、左方転位された名詞句 ((1)の *le président*)は文の主題 (topic / thème) として働くと広く認められている。一方、右方転位された名詞句 ((2)の *cette histoire*) は、先に出た代名詞 *la* の指示対象が何なのかを念押しする *after-thought* の役割をされると考えられている。本稿は「主題」(topic / thème)の概念を俎上に上げるので、以下では左方転位のみを論じる。

英語の転位構文について論じた Keenan & Schieffelin (1976)は、転位構文は文のレベルを超えた談話的性格を持つことを説得的に示した。そもそも主題は優れて談話的な概念なので、これは当然と言うべきかもしれない。この意味においてフランス語の転位構文を論じるのは、本書のテーマである「会話・談話・テキスト」に沿うものであると言える。

一方、主題 (topic / thème)は談話機能文法の中心的概念であるが、現在までにさまざまな定義が提案されてきた。本稿では「主題とは何か」という問題に最初は踏み込まず、とりあえずはややルーズに、主題に与えられてきた定義のほとんどをカバーする次の定義を採用しておく。

“What the topics appear to do is to limit the applicability of the main predication to a certain restricted domain. (...) Typically, it would seem, the topic sets a spatial, temporal, or individual framework within which the main predication holds.” (Chafe 1976: 50)

文の主たる陳述内容が適用される、時間的・空間的・個体的領域が主題ということである。上に挙げた例 (1)は個体 *le président* を領域とし、それについて「彼はまもなく辞任す

ることになる」という陳述を適用している。*In Boston, it is snowing.*では空間的領域が、*Yesterday, we went to a concert.*では時間的領域が主題として働いている。なお本稿では領域が個体（もしくは個体集合）と状況の集合の場合を考察対象とするので、空間や時間が主題となっているケースには踏み込まない。

主題はふつう意味的には定 (*definite / défini*)でなくてはならないとされている。転位名詞句が主題であるとする、転位できる名詞句は当然ながら定でなくてはならないことになる。事実、次に挙げるのが談話機能文法の最大公約数的意見と見てよい。

« Dans le cadre de l'approche pragmatique, l'assimilation faite entre l'élément disloqué, le thème et un élément donné a conduit à penser qu'une des caractéristiques majeures de tout élément disloqué est d'être défini. Dès lors, la propriété qui traduit l'impossibilité de disloquer un syntagme non défini est le signe d'une différence sur le statut informationnel de ce dernier (Chafe 1976 ; Prince 1985 et Barnes 1985). » (Blasco-Dulbecco 1999 : 69)

「語用論的アプローチでは、転位名詞句と主題と既知とが同一視され、その結果、転位名詞句の大きな特徴は定であると考えられるようになった。したがって、転位できないことが、定でない名詞句を情報構造上で特徴づける印であると見なされたのである。」

これを証明するために次のような例がよく挙げられる¹。

- (3) nous *le projet* il avance tu vois mais bon euh il faut le temps quoi quand même
(*(as for) us the project it is advancing you know well um we need time however*)
(我々について言うと、計画は進んでいるんだよ、わかるね、えーっと、でも時間が必要なんだ。)
- (4) * nous *un projet* il avance tu vois mais bon euh il faut le temps quoi quand même
(*(as for) us a project it is advancing you know well um we need time however*)

(3)では定名詞句 *le projet (the project)*が転位されていて適格な発話となっているが、(4)では不定名詞句 *un projet (a project)*が転位されているため不適格な発話である。

ただし、不定名詞句でも単数形ならば、転位されて総称解釈を受けることもよく知られている。この場合、照応的代名詞は人称代名詞系の *il / elle* ではなく、指示代名詞の *ça* が用いられる。

- (5) Un succès , *ça s'arrose.*
(*A success, it deserves a drink.*)
(何かうまく行ったときには祝杯を挙げるものだ。)

談話機能文法に基づく転位構文の研究史では、おおむね上のようなことが主張されてきた。ところが次のように、予想に反して不定冠詞複数形 *des* 付きの名詞句（以下 *des N* とする）や部分冠詞 *du / de la* 付きの名詞句（以下 *du N* とする）の転位例が観察される。

(6) En cette saison, *des voitures étrangères* au village, ça n'existe pas.

(In this season, %foreign cars in the village, that doesn't exist.)²

(この季節にこの村で外国車なんて、ありえないよ)

(7) *Des / Cent soldats*, ça ne disparaît pas ainsi.

(%Soldiers / A hundred soldiers, that doesn't disappear like that.)

(兵隊は /100 人の兵隊がそんなふうに忽然と消えるなどということはない。)

(8) *De l'argent*, c'est toujours utile.

(%Money, it's always useful.)

(お金はいつでも役に立つ。)

(7) (8)は総称文だと考えられるが、(6)では「この村で」(au village)という空間的限定があるため、総称文とは見なすことができない。また(8)は転位しない通常の主語・述語文にすると非文法的になる。

(9) **De l'argent est toujours utile.*

(%Money is always useful.)

(お金はいつでも役に立つ。)

したがって、上の例(6)~(8)では何重にも規則違反が観察される。その違反とは、

(A) 転位できるのは定名詞句に限られるとされているにもかかわらず、(6)~(8)では不定名詞句が転位されている。

(B) 不定名詞句のなかでも単数 un N に限っては、転位して指示代名詞 ça で受けることで総称解釈の適格文になるとされているが、(8)ではこれに反して部分冠詞 de l'の付いた名詞句が転位されていて総称になっている。

(C) (6)では不定冠詞複数 des N が転位され ça で受けられているが、意味は予想に反して総称ではない。

(D) (8)は(9)のように転位しない形に変えると、総称の意味を失うだけでなく、非文となる。一般に転位構文は、ふつうの主語・述語文に書き換えても容認度は変わらないので、(9)の振舞いは破格である。

筆者は、森・東郷(2004)、東郷(2006)において、des N と du N の総称文と転位構文を取り上げて、若干の考察を加えた。そこで行なった分析と結論は基本的には今でも変わらない。しかし、この2本の論文では、考察が形式意味論に傾き過ぎて、形式意味論に馴染みのない読者にはわかりにくかったと考えられる。また同時に、話し手と聞き手による談話構築という角度から考察を加える必要があると感じるようになったので、この問題を再び取り上げてみたい。

2 主題の定性再考

2.1 「主題は定」説

第1章でも述べたように、談話機能文法では主題は「定」(definite / défini)でなくてはならないと一般に考えられている。とはいえ、この考え方の流れにも大きく分けて2種類のもものが認められる。主題が定である必要性を、談話・認知的理由に基づくとする一派と、論理的必然性によるとする一派である。前者では、「定」を「旧情報」「既知情報」(old / given information)と同一視する。久野(1973)がその代表格である。

「主題となり得るのはすでに会話に登場した人物・事柄、すなわち、現在の会話の登場人物・事物リストに登録済みのものを指す名詞句である。指示対象が一義的に決まっている事物、例えば、the sun、the moon、my wife、my childrenなどは、常にこのようなリストに書きこまれていて、会話のたびに新しくリストに加える必要はない。(中略)総称名詞、例えば man『人間一般』、Americans『アメリカ人一般』、the linguist『言語学者一般』は、会話の度に、登場人物リストに書き込まれなくてもよい。」(久野 1973 : 29-30)

主題が旧情報・既知情報でなくてはならない理由は次のようだとされる。主題は what the sentence is about である。つまり、文がそれについて何かを述べる人や物である。主題を X とすると、X には次のような条件が要請されると考えるのが自然である。

- 条件1 : 当該の談話において、X は話し手にとっても聞き手にとっても1つに決まる。
- 条件2 : X は何らかの意味において、聞き手にとって既知でなくてはならない。

条件1はXの唯一性を規定し、条件2はXが聞き手にとって指示的(referential)であることを規定している。かんたんに言えば、Xは話題の中心なことから、Xの指示が決まらざぐらぐらしてはだめであり、また自分が知らないXについて話されても聞き手には何のことかわからないということである。定は指示が決定済みで、不定は未決定なので、主題には定であることが要請されるというわけだ。

このような談話・認知的流れと平行して、主に分析哲学を中心とする論理的流れがある。この流れは Strawson (1964) にまで遡る。Strawson は主題には次の性質があるとした。

- A. The topic is what the statement is about.
- B. The topic is used to invoke knowledge in the possession of an audience.
- C. The statement is assessed as putative information about its topic.

これを受けて Reinhart (1981)は topic について次のような定義を提案している。 a_i は主題として選択される名詞句、 ϕ は文が表す命題内容、 $\langle a_i, \phi \rangle$ は主題名詞句と命題内容の順序対、PPA は possible pragmatic assertion の略である。context set は Stalnaker (1978)の用語で、命題と結びつけられた可能世界の集合を意味する。

“To say that a sentence S uttered in a context C is about a_i , i. e., that the pair $\langle a_i, \phi \rangle$ of PPA_(S) is selected in C, is to say, first, that, if possible, the proposition θ expressed in S will be assessed

by the hearer in C with respect to the subset of proposition already listed in the context set under a_i , and, second, that if is not rejected it will be added to the context set under the entry a_i .”

(Reinhart 1981 : 81)

面倒な細かい点は省略すると、肝心なのは、文 S の命題内容 θ が主題として選択された項目 a_i と相対的に解釈されるという点である。つまり、主題とは文の真偽値を決定する鍵だということだ。この流れに位置する Erteschik-Shir (1997) は、Reinhart の定義をさらに一歩押し進めて、述定 (predication) を、主題を入力とし真偽値を出力とする関数と定義するに至った (Erteschik-Shir (1997) : 15)³。

このように主題を真偽値を与える鍵と見なすと、当然ながら主題は定であり既知でなくてはならないことになる。どの人、どの物について話しているのかわからなければ、聞き手は命題の真偽をチェックすることができないからである。Strawson の主題の定義 B に、すでに「聞き手の知識」が含まれていたことに留意しよう。

このように談話機能文法に代表される談話・認知的な考え方でも、分析哲学・形式意味論のような論理的な考え方でも、主題は「定」でなくてはならないとされるのである。

これとは別の考え方がないわけではない。たとえば Muller (1999) は、主題は定である必要も、既知である必要もなく、認知的に「卓立」(salient) していればよいのだと主張している⁴。また Ward & Prince (1991) は、主題に必要とされる条件は定でも既知でもなく、「半順序集合」関係 (partially ordered set relation) だとする。これは数学の集合論に基づいた概念で、次の 4 つの関係を指す : i) IS-A-MEMBER OF relation, ii) IS-PART-OF relation, iii) IS-A-SUBTYPE-OF relation, iv) IS-EQUAL-TO relation。次の例文が ii) の実例である。

(10) There are a couple of nice points in there. *One point* I can say something about. The other I'm not sure.

主題となっている “one point” は不定名詞句だが、“a couple of nice points” の部分であるため ii) の関係を満たし、主題として認可されるというわけだ。ここでは深くは立ち入らないが、このような不定主題は定の母集合を前提とすると考えることで、「主題=定」説に包摂できる。よって以下では、主題は定でなくてはならないという前提に立って話を進める。

2.2 談話モデルにおける定

筆者は東郷 (1999, 2000, 2001a, 2001b, 2002) において、「談話モデル理論」(Discourse Model Theory) と呼ぶ談話理論を提案してきた。談話モデル理論は、Fauconnier のメンタル・スペース理論を発展させたもので、談話指示子 (discourse referent) とそれに付随する談話情報を管理・更新するための談話理論である。

まず、談話を次のように定義する。「談話とは、話し手と聞き手の相互行為 (interaction) により、時系列に沿って、局所的に構築・処理される累積的 (incremental) な心的表象 (mental representation) である。」

談話モデルとは、話し手と聞き手の双方が保持し、談話の構築と理解の際に発動される

メンタル・スペースである。このスペースは、談話指示子 (discourse referent)⁵ とその属性情報が登録される一種のファイルシステム (mental file) である。

談話モデルは次のような下位領域からなる。

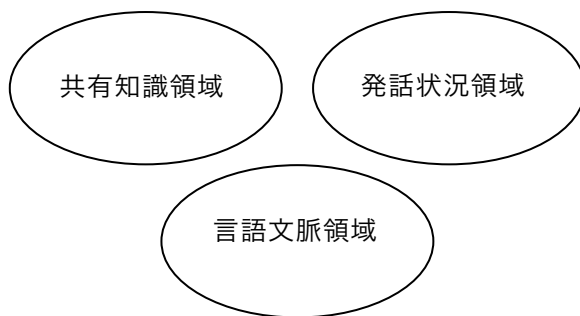
- A. 共有知識領域 Shared Knowledge
 - A-1. 百科事典的知識領域 Encyclopaedic Knowledge
 - A-2. エピソード記憶領域 Episodic Memory
- B. 発話状況領域 Context of Use
- C. 言語文脈領域 Linguistic Context

共有知識領域は、さらに百科事典的知識領域とエピソード記憶領域に分かれる。百科事典的知識領域には、Napoléon のような固有名、dog, gold のような類名、the sun のような唯一物が談話指示子としてあらかじめ登録されている。この他に、私たちが学校で習う地理や歴史や物理などの「世界についての知識」も登録されていると考える。この百科事典的知識領域の中身は、話し手と聞き手のあいだでほぼ共通である。エピソード記憶領域には、もっと個人的な体験に基づく知識や談話指示子が登録される。たとえば、「友人の太郎君」や「昨日私をひっかいた野良猫」などである。エピソード記憶領域は個人によって内容が異なるので、話し手と聞き手のあいだで共有されているのは、その部分集合である。

発話状況領域はいわゆる「発話の場」で、デフォルトで話し手と聞き手、および発話の場で知覚可能な事物が登録されている。この領域は直示 (deixis)が発動される場である。

言語文脈領域には、発話によって表現された言語情報が次々に登録される。この領域だけは談話開始時には初期値がゼロである。

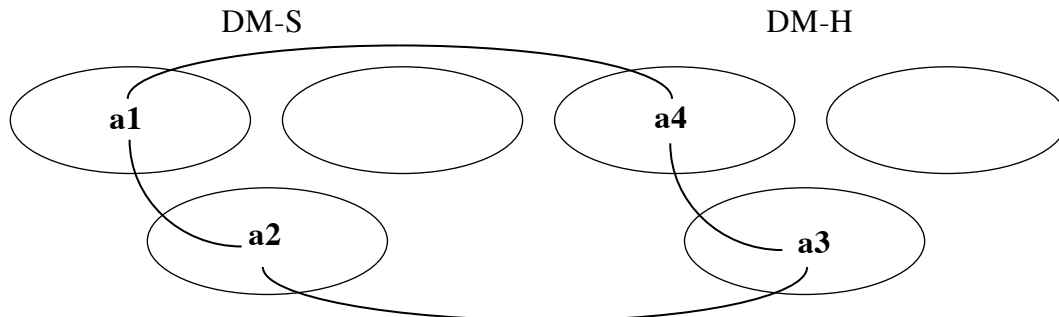
この三つの心的スペースを図式的に次のように表示する。



談話構築に参加する話し手と聞き手は、双方が心内に自分の談話モデルを保持していると考えられる。したがって、実際の談話の進行に伴う談話情報の管理と更新を扱うためには、話し手側の談話モデルと聞き手側の談話モデルを立てる必要がある。以下の図の DM-S は Discourse Model (speaker)の略で、DM-H は Discourse Model (hearer)の略である。談話モデルにはこれ以外にいくつかのコネクタが用いられる。いちばんよく用いるのは ID コネクタで、談話指示子 a と b とが同一の指示対象であることを示す。

共有知識領域が発動される例をひとつ挙げて、談話モデルの推移とコネクタの働きを見てみよう。たとえば Columbus discovered America in 1492. という文の処理過程を見ると、固有名 の Columbus と America は話し手と聞き手の共有知識領域に登録されている。以下では Columbus だけを考える。話し手はこの文を発話することで Columbus の談話指示子 a を

自分の言語文脈領域に a2 として登録する。a2 はただちに聞き手の言語文脈領域に a3 としてコピーされる。聞き手は自分の共有知識領域にそれに対応する談話指示子を探索に行き、a4 を発見する。これで a1、a2、a3、a4 の 4 つの談話指示子がすべて ID コネクタで結合され、談話処理は正しく完了する。「あなたの知っているコロンブス」が「私の知っているコロンブス」であるという共通の理解が成立するのである。



談話指示子には属性情報が付属している。談話指示子に属性情報を記載したタグが荷札のように付いていると考えればよい。そこに記載されているのは話し手がその談話指示子について「知っていること」である。今、話し手が *Columbus discovered America in 1492.* と発話したとき、聞き手はコロンブスがいつアメリカを発見したのか知らなかったというケースを考えてみよう。DM-H の共有知識領域に登録された a4 の属性情報には *in 1492* という情報が含まれていない。このとき話し手の発話は、「あなたの共有知識領域の中で *Columbus* と *America* を同定し、かつ *Columbus* の属性情報に *in 1492* を書き込め」という指令として働く。すなわち談話とは、話し手と聞き手のあいだでの**談話モデルの調整過程**であり、発話は**談話モデルをあるやり方でアップデートせよ**という指令と考えることができる⁶。

以上に概要を示した談話モデルを用いると、「定」とは何かを簡潔に表示できる。かんたんに言うと、ある名詞句が「定」であることの談話的定義は、**その名詞句の談話指示子が聞き手側の談話モデルのどこかの領域にすでに登録済みである**ということである。これには3つのケースと1つの補足的ケースが考えられる。まず、固有名と類名と *the sun* のような唯一物は、共有知識領域の百科事典的知識領域にすでに登録されているので、定として扱われる。次に発話の場にあるものは、聞き手にも知覚可能であるため定として扱われる。また先行文脈に1度登場したものは、2度目からは定として扱われるが、これは言語文脈領域に登録されたからである。次の例がそれぞれのケースを示す例文である。

(11) *The earth goes around the sun.* [共有知識領域に登録]

(12) *Shut the door.* [発話状況領域に登録]

(13) *A boy came in. {He / The boy} sat down in front of me.* [言語文脈領域に登録]

これ以外に共有知識領域に登録された認知フレームから導出可能な談話指示子もまた定として扱われる。連想照応として知られる現象であり、次の例では先行文脈が活性化した *taxi* フレームに *the driver* が含まれているため、定として扱われる。

(14) We took a taxi yesterday in LA. *The driver* was a Serbian.

定であるということは存在前提 (existential presupposition)を持つということであり、談話モデルは、談話の進行とともに変化する存在前提を動的に管理するシステムと見なすこともできる。

さて、2.1 節では談話機能文法の立場からも、分析哲学・形式意味論の立場からも、主題は定でなくてはならないことを見た。これまで見て来たことを総合すると、次の仮説を導くことができる。

仮説 1

主題は談話モデルを構成する共有知識領域・発話状況領域・言語文脈領域のいずれかに登録済みでなくてはならない。言い換えるならば、発話の際に話し手が主題として選ぶことができるのは、談話のその時点までに聞き手の談話モデルに登録されている要素でなくてはならない⁷。

3 主題とスキニング操作

3.1 量化の走る領域と主題

形式意味論で活躍するのは量化 (quantification) である。伝統的な意味論では、存在量化 (existential quantification) と全称量化 (universal quantification) の 2 つがあり、それぞれ \exists と \forall という記号で表される。量化子は変数を束縛する演算子である。かんたんな例を挙げる。 \wedge は連言記号 (and) を意味する。

(15) A boy came in. $\exists x(\text{boy}(x) \wedge \text{come-in}(x))$

一方、全称量化は伝統的には次のように表される。矢印は if... then... の論理関係を表す。

(16) Every student ate a banana. $\forall x(\text{student}(x) \rightarrow \exists y(\text{banana}(y) \wedge \text{eat}(x, y)))$

many や often のような数量や頻度を表す副詞も量化子として働くので、(16) のような表記に代わって次のような 3 分構造 (tripartite structure) が提案されるようになった⁸。

(17) Every student ate a banana. $\forall x[\text{student}(x)][\exists y(\text{banana}(y) \wedge \text{eat}(x, y))]$ ⁹

3 分構造は、[量化子] [制限部 (restriction)] [核作用域 (nuclear scope)] という一般構造を持つ。制限部は量化子が走る領域を指定する。(17) の例で言うと、文脈的に限定された the students という集合 (たとえば昨日のパーティーに参加した学生 20 人の集合) が制限部に入る。every はその領域をスキニングして、「学生 1 はバナナを食べた、学生 2 はバナナを食べた、学生 3 はバナナ食べた、…」のように、集合の元の数だけ命題の真偽を判

定する。20人の学生全部について「バナナを食べた」が真であるとき、文(17)は真であると判定されるという具合である。

さて、このように3分構造を規定すると、おもしろいことに気づく。3分構造の制限部が表しているのは、量子子によるスキヤニングを通して $x \text{ ate a banana}$ という命題が成り立つかどうか判定される集合である。ということは、制限部は *the framework within which the main predication holds* という Chafe の主題の定義を満たしているのだ。つまり3分構造における制限部とは文の主題に他ならない¹⁰。

(17)の前提には *the students (who took part in the party held yesterday)* という定の母集合がある。したがって(17)の訳は、「学生たちは || 全員バナナを食べた」という *topic-comment* 構造を持つ二重判断文になる。さらに2.2節で述べたように、主題は定でなくてはならないという説に従うと、次の仮説を導くことができる。

仮説2

量子子の走る領域を指定する制限部に入るものは定でなくてはならない。

この仮説と仮説1を組み合わせると次の仮説が導ける。

仮説3

制限部に入るものは、談話モデルのどこかの領域に登録済みでなくてはならない。

(17)の例で言うと、先行文脈としてたとえば *Twenty students took part in the party held yesterday at Marton College*. 「昨日マートン・カレッジで開かれたパーティーに20人の学生が参加した」があるとすると、不定名詞句 *twenty students* が存在量化を受けて、談話モデル内の言語文脈領域に登録され、以後の談話においては定として扱われ (*the students who took part in the party held yesterday at Marton College*)、存在前提を獲得する¹¹。すると、それに対応する談話指示子は言語文脈領域に登録済みとなるので、(17)の意味解釈に当たっては仮説2と仮説3を満たしていることになり、適切な解釈が可能となる。

3.2 何が制限部に入るのか

それでは次に、統語論と意味論のあいだを橋渡しするために、文の何が制限部に入るのかを考えなくてはならない。Diesing (1996: 10)は次のような写像規則を提案している。

Mapping Hypothesis

Material from VP is mapped into the nuclear scope.

Material from IP is mapped into the restrictive clause.

この仮説を次の例に適用すると、まず Cellists が IP の指定部(spec)に入り、意味部門で制限部に写像される。次に述部の (*seldom*) *play out of tune* が核作用域に写像される。*seldom* は量子子上昇を受けて先頭の位置に入るという具合である。

(18) Cellists seldom play out of tune.

Dobrovie-Sorin & Beyssade (2004 : 160)は、諸家の研究をまとめる形で次のような要素が制限部に入るとしている。

- (19) a. si (if)や quand (when)が導く従属節は制限部に入る。(Lewis (1975), Heim (1982))
 b. 総称文で文の主題となる名詞句は制限部に入る。
 c. 量化副詞を含む文は核作用域に入り、制限部には焦点閉包 (focus closure)が入る。焦点閉包は、文の焦点を変数で置換したものである。(Rooth (1985) (1995))
 d. 量化副詞を含む文は核作用域に入り、制限部には文の前提が入る。(Schubert & Pelletier (1987) (1988))

本稿の扱う問題との関連では、上の(19 a)が注目される。Dobrovie-Sorin & Beyssade によれば、(19 a)の説を認めると(20 a)に対して(20 b)のような式を与えることになる。

- (20) a. Quand Jean invite une amie, il lui prépare toujours à dîner.
 (When John invites a girl friend, he always prepares dinner for her.)
 (女友達を自宅に招待するときには、ジャンはいつでも夕食を用意する。)
 b. $\forall e$ [invite(e, Jean, f(e)) \wedge girl-friend(f(e))] [prepare-dinner-for(e, Jean, f(e))]¹²

この式には少し説明が必要である。まず全称量化子 \forall が取っている変数 e は Davidson 項として知られる出来事変数 (event variable)である。(20 a)は「ジャンが夕食を用意するという出来事がいつも起きる」ことを述べているのだから、量化は個体にかかるのではなく、時間軸上での出来事の生起にかかる。次に $f(e)$ は原文の *une amie* (a girl friend)に対応する要素で、出来事を入力として「女友達」の外延を出力とする関数である¹³。かんたんに言うと、ジャンが女友達を自宅に招くという出来事1で女友達 Marie を、出来事2で女友達 Sandrine を、出来事3で女友達 Sylvie をそれぞれ与える関数と考えていただきたい。

さて、(20 b)の論理式で制限部に入っているのは、「John invites a girl friend」という出来事の集合である。これを認めるためには、次の2つの疑問に答えなくてはならない。

疑問 1

制限部に入るのは文の主題であるが、出来事の集合を主題と考えることができるのだろうか。

疑問 2

主題は定でなくてはならないが、出来事の集合を定とみなすことができるのだろうか。

まず疑問 1 であるが、談話機能文法の主題をめぐる議論のなかで、たとえば Haiman (1978)などは条件節を topic として認められると論じている。また、日本語でも「今度来るときには電話してください」のように、「…とき」節に提題の助詞ハが付くので、出来事の

集合は主題になりうると考えてよいだろう。

疑問2は個体の量化と比較して考えればよい。浮気者のピエールはガールフレンドを取っ替え引っ替えしているが、どの女もいけ好かない女ばかりなので、私はピエールのガールフレンドが嫌いだと言う場合を考えてみよう。Je n'aime pas les petites amies de Pierre. (I don't like the girl friends of Peter.) となり、ピエールのガールフレンドは定名詞句 les petites amies de Pierre (the girl friends of Peter)で表される。これはピエールのガールフレンドの集合だが、元がいくつ含まれているかはわからない。ピエールが今後もガールフレンドを次々に変えると、元の数が増えることになる。しかし、「ピエールのガールフレンドである」という属性に基づいて構築された集合は、定名詞句 les petites amies de Pierre で表すことができる。これと同じく"John invites a girl friend"という出来事の集合も、元がいくつあるかわからないが、定とみなすことができるとしてよさそうである。

4 Des N 主語の総称文

4.1 総称文の主語の限定詞

フランス語の総称文の主語に付く限定詞は、不定冠詞単数(21 a)、定冠詞単数(21 b)、および定冠詞複数(21 c)である。

- (21) a. *Un garçon est l'œuvre de sa mère.*
(A boy is made by his mother.)
(男の子は母親の作品である。)
- b. *Le chat est carnivore.*
(The cat is carnivorous.)
(ネコは肉食である。)
- c. *Les castors constuisent des barrages.*
(Beavers build dams.)¹⁴
(ビーバーはダムを作る。)

不定冠詞複数 (des)と部分冠詞 (du, de la)は総称文の主語に付くことはできない。

- (22) a. **Des carrés ont quatre côtés.*
(%Squares have four sides.)
(正方形には辺が4つある。)
- b. **De l'eau est un liquide transparent.*
(%Water is a transparent liquid.)
(水は透明な液体である。)

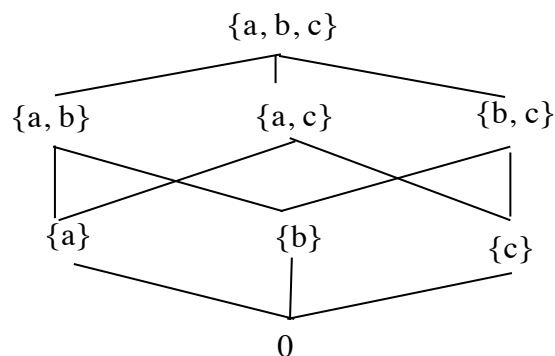
不定冠詞の単数形 un N は(21 a)のように総称文の主語に付くことができるので、これは一見すると不思議な現象である。Carlier (2001)はその理由を、不定冠詞複数や部分冠詞が

持つ“indétermination quantitative”という意味的特性に帰している。不定冠詞単数 un は「1つ」と数量が限定されているが、不定冠詞複数や部分冠詞は数量が限定されておらず、このために総称になれないというのである。

不定冠詞単数形 un N が総称文 〈Un N+P〉 (P は述語) の主語になれるのは、N の要素ひとつひとつについて述語 P が当てはまるかどうかを判定することによって、集合{N}全体についての判定に至るからだと考えられる。不定冠詞複数や部分冠詞に同じ操作ができない理由は、これらの限定詞の形成過程に求めることができる。不定冠詞複数 des は、部分を表す前置詞 de と定冠詞 les が縮約してできたものであり、本来は数や量の定まった集合の一部を表していた。現代フランス語では、J’ai mangé des pommes. (I ate %apples.) は「私はリンゴをいくつか食べた」という意味だが、もともとは「私は特定のリンゴのうちいくつかを食べた」という意味であった¹⁵。部分冠詞 de も前置詞 de と定冠詞 le が縮約したもので、J’ai bu du vin. (I drunk %wine.) は「私は特定のワインのうち少しを飲んだ」という意味だった。だから des や du は「全体のうちの部分」を表していたのである。総称はクラスの成員全部に当てはまる属性を述べる文なので、des や du が歴史的に引きずっている部分という意味は総称と衝突する。ここに des や du が総称文の主語に使えない理由がある。

しかし、次のような疑問が湧くかもしれない。数や量が不定であろうと、部分を表してしようと、〈Des / Du N+P〉でもって述語 P が成り立つかどうかを N の部分について何度も確かめる作業を繰り返せば、そのうち{N}の集合全体にたどり着くのではないか？ 風呂桶に一杯水を入れる作業をすることとして、水を汲むのに使う容器が小さな柄杓であったり大きなバケツであったりして定まっていなくても、根気よく繰り返せばそのうち風呂桶は一杯になるのではないか？ Carlier (2001)の「数量不特定説」ではこの素朴な疑問に答えることができない。

意味論では量化をかけることが可能な集合には、次のようなラティス構造 (lattice structure)があると考えられている (Link 1983)。ラティス構造とは、図のように順序づけられた内部構造で、この図では{a, b, c} という3つの元からなる集合を例にとっている。



集合がこのような内部構造を持っているときに限り、部分集合を取り出すことができると考えられている。ここから取り出すことができる真部分集合は {a, b} {a, c} {b, c} {a} {b} {c} {0}であり、これは {a, b, c} のべき集合に等しい。このような内部構造を持つ集合が量化を受けると、Tous les garçons ont mangé une banane. (All the boys ate a banana.)では上の図の頂点において集合が捉えられており、La plupart des garçons ont mangé une banane.

(Most of the boys ate a banana.)では頂点から少し下がった位置で、Chaque garçon a mangé une banane. (Each boy ate a banana.)では{a} {b} {c}にまで分解されたレベルで捉えられていることになる。言い換えれば、tous (all), la plupart de (most of), chaque (each)などの強限定詞 (strong determiner, cf. Milsark (1977))は、上の図のようなラティス構造を持つ定集合の存在を前提とするのである。

一方、不定冠詞複数 des や部分冠詞 du の作る集合にはこのようなラティス構造がなく、均質で不定の集合だと考えられている。このことは2つの帰結を持つ。1つは des N や du N には内部構造がないため、個体{a} {b} {c}にまで分解することができない。このため累加性を持たず、des N をいくら足し合わせても des garçons + des garçons = des garçons になり、du N も同じように du vin + du vin = du vin となり、決して集合全体を表す les N / le N に到達することがない。つまりいくら水を汲んでも風呂桶を一杯にすることはできないのである。また、個体{a} {b} {c}に分解することができないことから、des N は個体変数ではなく集合変数を導入すると考えられる。(22 a)の *Des carrés ont quatre côtés. (&Squares have four sides.) で、述語 avoir quatre côtés (have four sides)は正方形1つ1つについて成り立つ属性であり、いくつかの正方形をまとめて全体に成り立つ述語ではない(これを分配的解釈という)。だからこの述語を適用するためには、主語は個体変数を導入しなくてはならないが、des N は集合変数を導入するため矛盾が生じて非文になると説明できるのである。

4.2 Des N 主語総称文

ところがその一方で des N 主語を持つ総称文が存在することが指摘されている(Attal (1976), Corblin (1987), Corblin (1989), Carlier (1989), Danon-Boileau (1989), Carlier (2001), Heyd (2002), Dobrovie-Sorin&Beysade (2004))。

- (23) a. Des diplomates doivent être discrets. (Attal (1976))
 (%Diplomats must keep a secret.)
 (外交官は口が堅くなくてはならない。)
- b. Des gendarmes peuvent confisquer une voiture. (Carlier (1989))
 (%Military-police officers can seize a car.)
 (憲兵は自動車を押収することができる。)
- c. Des jeunes filles doivent se montrer discrètes. (Corblin (1987))
 (%Young ladies ought to behave with discretion.)
 (若い女性は慎み深くなくてはならない。)
- d. Des amis s'entraident toujours. (Carlier (2001))
 (%Friends always help each other.)
 (友人というのはいつも助け合うものだ。)
- e. Des guêpes énervés sont un danger terrible. (Dobrovie-Sorin&Beysade (2004))
 (%Excited hornets are a terrible danger.)
 (気のたった雀蜂は恐ろしい脅威だ。)
- f. Des hommes forts peuvent soulever un piano. (Dobrovie-Sorin &Beysade (2004))

(%Strong men can lift a piano.)

(力の強い男数人でかかればピアノを持ち上げることができる。)

g. Des rosiers qu'on ne taille pas ne donnent pas de belles fleurs. (Galmiche 1986)

(%Rose trees which are not pruned don't bear beautiful flowers.)

(剪定しないバラの木にはきれいな花は咲かない。)

その一方で、des N 主語では成立しない総称文が多いという事実は変わらない。

(24) a. *Des enfants prématurés marchent rarement avant 10 mois.

(%Premature infants rarely walk before 10 months.)

(早産で生まれた子が 10 ヶ月より前に歩くことはめったにない。)

b. *Des Roumains éduqués parlent français.

(%Educated Romanians speak French.)

(教育のあるルーマニア人はフランス語を話す。)

c. *Des hirondelles se dispersent en été, mais se rassemblent en automne pour la migration vers le sud.

(%Swallows disperse in summer, but gather in autumn for migration to the south.)

(ツバメは夏にばらばらになるが、秋になると南への渡りのためにまた集まる。)

Des N 主語による総称文として容認可能なものと不可能なものがあるのはどうしてだろうか。何が両者を分けているのだろうか。上に挙げた先行研究で容認可能とされた des N 総称文は、3つのグループに分けることができる。

[A] devoir (must), pouvoir (can)のようなモーダル動詞がある例 (23 a) (23 b) (23 c)

[B] des N に修飾語句や関係節が付いている例 (23 e) (23 g)

[C] s'entraider (助け合う), rivaliser (競い合う) など相互的意味の述語を持つ例 (23 d)

このうち[B]グループについては、紙幅の関係で手短になったが森・東郷(2004)で扱ったので、ここでは繰り返しを避けるために、そこでの分析をかんたんに紹介しておく。総称文は topic-comment 形式を持つ二重判断文であり、主題を持つため、論理式では 3 分構造が要請される。3.2 節で述べたように、このとき問題になるのは何が制限部に入るのかという点である。Dobrovie-Sorin & Beyssade (2004)の分析に従って、総称文に働く量化には個体量化と状況量化（または出来事量化）があると考えられる。

(25) 個体量化 (quantification over individuals)

Un chien est généralement intelligent.

(A dog is generally intelligent.)

(犬はたいてい賢い。)

GENx [dog(x)] [intelligent(x)]

個体量化では、総称量化子 GEN が走る領域は制限部に入っている犬の集合である。表

層で *généralement* (generally)として実現されている量化副詞は、犬の集合に含まれた元を直接に量化すると考えられる。

(26) 状況量化 (quantification over situations)

Des lions blessés sont vulnérables.

(%Wounded lions are vulnerable.)

(傷を負ったライオンは無防備だ。)

GEN [$\lambda s \exists x(\text{lion}(x) \wedge \text{wounded}(x, s))$] [$\lambda s \exists x(\text{lion}(x) \wedge \text{wounded}(x, s) \wedge \text{vulnerable}(x, s))$]

状況量化では、総称演算子 GEN が走るのは、個体集合ではなく状況の集合である。なお、例(20)の式では出来事変数 *e* を用いていたが、ここでは時空変数 *s* を用いた式になっている。両者に本質的なちがいはないので、以下では出来事ではなく状況という用語を用いる。制限部に入っているのは「傷を負ったライオンがいる状況」の集合である。核作用域の中身は「傷を負ったライオンがいて、かつ無防備である状況の集合」である。GENはこの式では束縛する変数を指定しない *unselective binder* にしてあるが、ライオンを表す *x* はすでに存在量化子に束縛されているので、GEN が束縛できるのは時空変数 *s* になる。

この式のミソは、ライオンは GEN によって直接に量化されるのではなく、状況の量化を通して間接的に量化されているという点にある。イメージで説明すると、ライオンが一頭いて傷を負っているという状況を思い浮かべればよい。そのときその状況においてそのライオンは無防備である。そのようにイメージできるすべての状況において、ライオンが無防備だということが成り立つと、この式は述べていることになる。これをふつうのフランス語でパラフレーズすると、*Quand il y a un lion et il est blessé, il est (toujours) vulnérable.* (When there is a lion and it is wounded, it is (always) vulnerable.) となろう。個体を直接に全称量化したときには *Les chats sont carnivores.* (Cats are carnivorous.)のように定冠詞複数形 *les* を得るが、状況量化の場合は個体は直接に量化されないで、その結果として不定冠詞複数形 *des* が得られると考えられる。ここまでが *des N* 総称の B グループの説明になる。

次は A グループのモーダル動詞を含む例である。次を代表として分析しよう。

(27) Des hommes forts peuvent soulever un piano.

(%Strong men can lift a piano.)

(力の強い男数人でかかればピアノを持ち上げることができる。)

この例の分析にあたっては、Dobrovie-Sorin&Beysade (2004)に従い A グループと同様に状況量化がかかっているとみなす。

(28) GEN [$\lambda s \exists x(\text{strong-man}(x) \wedge \text{try-to-lift-a-piano}(s, x))$] [$\lambda s \exists x(\text{strong-man}(x) \wedge \text{try-to-lift-a-piano}(s, x) \wedge \text{can-lift-a-piano}(s, x))$]

(28)で制限部に入っているのは、「屈強な男がいてピアノを持ち上げようとしている状況」

の集合である。「ピアノを持ち上げようとしている」が制限部に入る理由は(19 c)による。ピアノを持ち上げることができるためには、持ちあげようとしなくてはならない。「ピアノを持ち上げようとしている」は持ちあげることができるための前提である。

(23 a)では「秘密を守らなくてはならない状況」、(23 b)では「自動車を押収しなくてはならない状況」、(23 c)では「慎重深く振舞わなくてはならない状況」が制限部に入ると考えられる。

次は C グループの相互的意味の動詞がある例を見よう。

- (29) a. *Des sœurs se rivalisent souvent.*
(%Sisters often rival each other.)
(姉妹はしばしば張り合う。)
- b. *Des pays limitrophes ont souvent des rapports difficiles.*
(%Neighbor countries often have difficult relations.)
(隣接する国はよく関係がもつれることがある。)

この例には興味深い特徴がある。*se rivaliser*(たがいに張り合う)とか *s'entraider*(たがいに助け合う)のように相互的意味の動詞があるという特徴に加えて、主語も「姉妹」や「隣接する国」や「友人」のように、何らかの関係で結ばれた複数主語になっている。Dobrovie-Sorin&Beysade (2004)はこのような例について、状況量化ではなく集合的個体の量化だとする分析を提案している。*des N* は要素である個体に還元することができない不定の集合を表す。個体変数を *x* とし、集合変数を *X* と書くとする。この例に現れる *se rivaliser*(たがいに張り合う)などの動詞は、個体変数を取ることができない述語である。1人で張り合うことはできないからである。「張り合う」の主語はある関係に置かれた複数の人でなくてはならない。したがって、(29 a)は次のように表すことができる。

- (30) GEN X[sister(X)] [rival-each-other(X)]

これは個体に対する量化ではなく、「個体のグループ」に対する量化を表すことになる¹⁶。

4.3 *des N* の転位構文

ではここで冒頭の例文(6)(7)(8)に戻って、*des N* の転位構文を考えてみよう。読者の便宜のため以下に再掲する。

- (6) *En cette saison, des voitures étrangères au village, ça n'existe pas.*
(In this season, %foreign cars in the village, that doesn't exist.)
(この季節にこの村で外国車なんて、ありえないよ)
- (7) *Des / Cent soldats, ça ne disparaît pas ainsi.*

(%Soldiers / A hundred soldiers, that doesn't disappear like that.)
(兵隊は /100 人の兵隊がそんなふうに忽然と消えるなどということはない。)

(8) *De l'argent, c'est toujours utile.*

(%Money, it's always useful.)

(お金はいつでも役に立つ。)

ここでは東郷(2006)で提案した分析を辿りながら若干の補足を加えていきたい。考察の出発点となるのは Léard(1987)の次の例文である。

(31) a. *Beaucoup d'arbres attirent des insectes.*

(Many trees attract insects.)

(昆虫が好んで寄って来る木がたくさんある。)

b. *Deux arbres attirent des insectes.*

(Two trees attract insects.)

(昆虫が好んで寄って来る木が2種類ある。)

(31 a)は「木の中には昆虫が好んで寄って来る、たとえばクヌギやナラなどの樹種が多く存在する」という意味で、*arbre (tree)*はサブクラス解釈される。ナラやクヌギは木のサブクラスである。(31 b)も同様である。このとき述語 *attirer des insectes (attract insects)*は樹種1つ1つに分配的に適用される(ナラについてもクヌギについても個別に成り立つ)。ところがこの例を転位構文に書き換えると、意味が劇的に変化することを Léard は指摘した。

(32) a. *Beaucoup d'arbres, ça attire des insectes.*

(Many trees, that attracts insects.)

(木がたくさん生えているところには虫が好んで寄って来る。)

b. *Deux arbres, ça attire des insectes.*

(Two trees, that attracts insects.)

(木が2本生えているところには虫が好んで寄って来る。)

(32 a)は「木がたくさん生えていると虫が寄って来る」と訳してもよい。*quand / s'il y a beaucoup d'arbres (when / if there are many trees)* とパラフレーズすることができる。Léard は転位されていない(31)で *beaucoup d'arbres (many trees)*は“*classe d'objets*”(物の集合)を表すが、転位した(32)では“*classe de situations*”(状況の集合)を表すと鋭く指摘している。ここで3分構造の制限部に入るものを規定した(19 a)をもう一度思い出そう。

(19) a. *si (if)*や *quand (when)*が導く従属節は制限部に入る。(Lewis (1975), Heim (1982))

(32 a)の *beaucoup d'arbres (many trees)*がもし *quand / s'il y a beaucoup d'arbres (when / if there are many trees)* とパラフレーズすることができるのなら、(19 a)の規定によって制限部に入ることになる。すると(32 a)には次の論理式を与えることができる。制限部に入っているのは、「木がたくさん生えている状況」の集合である。

(33) GEN [$\lambda s \text{ MANY}_x(\text{tree}(x) \wedge \text{be}(s, x))$] [$\lambda s \text{ MANY}_x(\text{tree}(x) \wedge \text{be}(s, x)) \wedge \text{attract-insect}(x, s)$]

4.1 節で *des N* や *du N* はラティス構造を持たず、内部構造のない不定集合であることを見た。このことは *un N* を除く弱限定詞にも当てはまる。*beaucoup de (many)* は強限定詞としても弱限定詞としても働く量化子である。母集合を前提とするときは「…のうちの多く」という強限定詞となり、母集合を前提としないときには弱限定詞となる。転位していない (31 a) では *beaucoup de* は強限定詞として働き、分配解釈を生み出している。(31 a) がサブクラス解釈になるのはこのためである。一方、転位している (32 a) では弱限定詞であり、分配解釈が不可能になる。このことは (32 a) が「木がたくさん生えているところには虫が好んで寄って来る」という意味であることとびつたり符合する。(32 a) では 1 本 1 本の木(または樹種)が虫を引き寄せるのではなく、たくさん寄り集まって全体として虫を引き寄せるのである。

同じように *du N* の転位構文にも次の式を与えることができる。制限部は「お金がある状況の集合」である。

(34) *De l'argent, c'est toujours utile.*

GEN [$\lambda s \exists x(\text{money}(x) \wedge \text{be}(s, x))$] [$\lambda s \exists x(\text{money}(x) \wedge \text{be}(s, x)) \wedge \text{useful}(x, s)$]

ここから次の仮説を導くことができる。

仮説 4

転位された *des N*, *du N* は状況の集合を表し、3 分構造の制限部に入って、量化子の走る領域を形成する。

すでに見たように、3 分構造は量化副詞を含む文の真偽が判定される領域を表し、これは主題に他ならない。しかし、仮説 4 は一見すると 2 章で見た「主題は定でなくてはならない」という談話機能文法の了解事項に抵触することになってしまう。転位されている *des N* / *du N* は、形態的には明らかに不定だからである。

この矛盾を解決する方法は 1 つしかない。それは「形態的な定」と「意味的な定」を区別することである。転位構文の *des N* / *du N* は形態的には不定だが、意味的には定だと考えることができる。

そもそも主題がなぜ定でなくてはならないかという、それは主題が文の真偽を判定する鍵となるので、何について / どれについて話しているのかが聞き手にわからなければ、真偽を判定することができないからであった。この「何について / どれについて話しているのかが聞き手にわかる」というのが意味的に定ということである。逆に言えば、何について / どれについて話しているのかが聞き手にわかるなら、主題は表層上では形態的に不定であってもかまわないことになる。これがまさに転位構文の *des N* / *du N* の場合だと考えることができる。(32 a) の転位された主題は、「木がたくさん生えている状況の集合」を表しているが、この集合は聞き手にとって容易に構築可能であり、「この世にいるカピバラ

の集合」という個体集合と同じように、「どれのことを指しているのか聞き手にわかる」という意味で意味的には定である。したがって、仮説4を提示すると同時に、「主題は定でなくてはならない」というテーゼを「主題は意味的に定でなくてはならない」と書き換える必要があることになる。

4.3 Des N の非総称文

最後に考えなくてはならないのは、des N / du N の転位構文のうちで、総称ではないグループである。このグループには、転位名詞句が常に中性代名詞 en で照応されるという統語的特徴がある¹⁷。それに加えて文の述語は、「ある」「ない」や「持っている」「持っていない」のように、des N の存在・非存在を述べるものが圧倒的 majority を占めている。

(35) a. *Des journaux qui viennent du Portugal, il y en a pratiquement pas.*

(%Newspapers which come from Portugal, there are practically not any.)

(ポルトガルから届く新聞は、事実上存在しない。)

b. *Des accidents sportifs, j'en ai eu pas mal.*

(%Sports accidents, I have had many.)

(スポーツ事故なら、私は少なからず経験した。)

c. *Mais de l'amour, je n'en ai jamais eu pour vous.*

(%But love, I have not had for you.)

(愛情なら、私はあなたに抱いたことは一度もない。)

これらの例については、前節での分析は当てはまらず、転位名詞句が「ポルトガルから届く新聞がある状況」「スポーツ事故を経験する状況」「愛情のある状況」を表しているとは考えにくい。また動詞が過去形に置かれている例があることからわかるように、これらは総称文ではない。だからある状況の集合を主題として、常に成り立つ属性を表しているのではない。ではどのように考えるべきだろうか。東郷(2006)ではこの例にも、転位名詞句が状況の集合を表すという前節で示した分析を等しく適用していたが、今から考えるとこれは的を外していたと言わざるを得ない。次の例をもとに考えてみよう。

(36) *De l'argent, elle en possède, cela se voit.*

(%Money, she possesses, that is visible.)

(お金なら彼女は持ってるよ、見ればわかる。)

(36)の転位された *de l'argent* は「お金なら」あるいは「お金だったら」と訳するのが原文のニュアンスをいちばん正確に反映している。つまり転位部分は、「私が(あるいはあなたが)お金を話題にしたいのならば」、あるいは「お金が話題になっている談話状況を考えるならば」とパラフレーズすることができる。

このように転位名詞句 *de l'argent* を「お金が話題になっている状況」と考えるとしても、この状況は前節で検討した *De l'argent, c'est toujours utile. (%Money, it's always useful.)* の場

合とは異なり、「お金がある状況の集合」と「お金があり、かつ役に立つ状況」の集合を比較して写像しているわけではない。De l'argent, c'est toujours utile.では、2つの集合は文の意味を構成する同じレベルにある。一方、(36)の転位名詞句が表している「お金が話題になっている状況」は、主題の選択という談話管理に関わるメタレベルに位置しており、残りの elle en possède (she possesses)という事実関係についての判断を述べる部分とはレベルを異にしている。これは次のような文副詞のケースとよく似ている。

(37) *Frankly speaking*, this is not a suitable job for women.

文副詞の *frankly speaking* 「率直に言って」は、残りの「これは女性に向けた仕事ではない」という命題内容の一部を構成するものではなく、いわばそれにかぶさるように発話主体の判断態度を表している。

(36)の転位された de l'argent は、If we take up a situation in which you would like to know if she has money or not とパラフレーズすることができる。「お金が話題になっている状況」は、話し手と聞き手が談話を進めるにあたって、主題として取り上げることができる状況である。だからこそ適切な日本語訳では、「お金なら」「お金だったら」のように条件節の一種として訳されるのである。

(19)で見たように、条件節も制限部に入ることを認めるならば、(36)の de l'argent も制限部に入ることになるのだが、適切な論理式を考えることは難しい。なぜなら(34)では「お金がある状況」が問題になっていたが、(36)では「お金が話題になっている状況」であり。このなかの「話題になっている」という部分が談話管理に関わるメタレベルのことがらだからである。一般的に言って、形式意味論は真理条件に基づいて世界のあり方を記述する方法論である。しかし、(36)を正しく処理するためには、「世界のあり方」だけではなく、「談話のあり方」を記述する装置が必要になる。

本稿で紹介した談話モデル理論にも、今のところそのような装置はない。談話モデルの管理状況や更新状況を外からモニターし管理するもう1つのモデルが必要になると思われるが、これについては今後の課題としたい。

5 おわりに

本稿では以下ことを示した。

- (A) 総称文の un N を除き、不定の des N、du N は主題となることができず、総称文の主語にはなれないとされてきたが、「N が存在する状況の集合」を表すときは総称文の主語になることができる。
- (B) 主題に課せられる条件は、形態的に定ではなく、意味的に定ということである。意味的に定とは、聞き手が問題の個体に認知的にアクセスしたり、集合を適切に形成できるということである。
- (C) des N、du N は転位されないとされてきたが、実際には de N、du N の転位構文は観察され、総称文で N が存在する状況の集合を表す。

(D) ただし、des N、du N の転位のうち、中性代名詞 en で受けるタイプの転位構文は、談話管理に関わる側面を持っており、(C)のようには分析できない。

残された課題は多い。(D)で述べた談話管理に関わる側面を形式意味論で扱うことは不可能であり、適切な談話理論が必要とされるが、その詳細はまだ不明である。このためには文の左方周辺部 (left peripheral)の談話機能に関する意味論的・語用論的考察が今後さらに必要となるだろう。

また Des soldats, ça ne disparaît pas ainsi. (&Soldiers, that doesn't disappear like that.)のような des N / du N 転位構文では、主節の主語に指示代名詞 ça が用いられるが、この代名詞の働きにもさらに考察を加える必要がある。des soldats と ça が同一指示の関係にあると言えるのかどうかはきわめて疑わしい。Burston and Monville-Burston (1981)や Cadiot (1988)らは「指示のずれ」(décalage référentiel)が起きていると主張し、Furukawa (1989)は「脱指示化」(déréférentiation)が起きていると指摘しているが、さらに検討が必要である。

この点で上の(D)で述べた des N / du N を en で受けるタイプの転位構文は他とやや異なる点が注目される。代名詞 en にはもともと部分を表す働きがあるので¹⁸、転位された des N とそれを受ける代名詞 en は同一指示の関係にはない。またフランス語話者の語感によれば、次の a.と b.にはほとんど意味の差が感じられないという。(38 a)ではダニは定冠詞複数 les で転位され、(38 b) では不定冠詞複数 des で転位されている。

- (38) a. Je suis allergique aux acariens. — Oh, *les acariens*, il y en a partout.
(I'm allergic to acarids. — Oh, *acarids*, we find them everywhere.)
(「私はダニアレルギーなんです」「ダニはどこにでもいますね」)
- b. Je suis allergique aux acariens. — Oh, *des acariens*, il y en a partout.

(38 a)で転位された les acariens (*the acarids*)と(38 b)の des acariens (*%acarids*)を、前節の最後で述べたように、「ダニが話題になっている状況の集合」であると仮定すると、その状況におけるダニの外延を考えなくてはならない。(38 a)の les acariens はダニの集合全体を話題にし、(38 b)の des acariens はダニの集合の部分を話題にしていると考えることができる。しかし、全体であろうが部分であろうが、そこから en によって部分を取り出してその存在を述べると、全体の部分も部分の部分も、結局は(不定)部分ということになり、同じことになってしまう。これが(38 a)と(38 b)のあいだに意味の差が感じられない理由ではないかと推測できる。詳細については今後の課題としたい。

[参考文献]

- Attal, Pierre. (1976) À propos de l'indéfini « des ». Problèmes de représentation sémantique. *Le Français moderne* 2 : 126-142. Paris : Editions d'Artrey.
- Barnes, Betty. (1985) *The Pragmatics of Left Dislocation in Spoken Standard French*. Amsterdam : Benjamins.
- Blasco-Dulbecco, Mylène. (1999) *Les dislocations en français contemporain. Étude syntaxique*.

Paris : Honoré Champion.

- Burston, Jack, L. and Monique Monville-Burston. (1981) The Use of Demonstrative and Personal Pronouns as Anaphoric Subjects of the Verb *être*. *Linguisticae Investigationes* 5 : 231-257.
- Cadiot, Pierre. (1988) De quoi *ça* parle ? À propos de la référence de *ça*, pronom-sujet. *Le Français moderne* 65 : 174-192.
- Carlier, Anne. (1989) Généricité du syntagme nominal sujet et modalité. *Travaux de linguistique* 19 : 33-56. Leuven-la-Neuve : Duculot.
- Carlier, Anne. (2001) La résistance des articles *du* et *des* à l'interprétation générique. Dany Amiot et als. (eds) *Le syntagme nominal. Syntaxe et sémantique*, pp. 65-88. Arras : Artois Presses Universitaires.
- Chafe, Wallace. (1976) Givenness, Contrastiveness, Definiteness, Subjects, Topics, and Point of View. Charles. N. Li (ed.) *Subject and Topic*, pp. 35-56. New York : Academic Press.
- Cierchia, Gennaro. (1995) *Dynamics of Meaning, Anaphora, Presupposition and the Theory of Grammar*. Chicago : The University of Chicago Press.
- Corblin, Francis. (1987) *Indéfini, défini et démonstratif. Constructions linguistiques de la référence*. Genève / Paris : Droz.
- Corblin, Francis. (1989) Spécifique – générique. Un modèle pour les indéfinis. *Modèles Linguistiques* XI-2 : 11-35. Toulon : Université de Toulon.
- Danon-Boileau, Laurent. (1989) La définitude du sujet. *Langages* 94 : 39-72. Paris : Larousse.
- De Fornel, Michel. (1988) Constructions disloquées, mouvement thématique et organisation préférentielle dans la conversation. *Langue française* 78 : 101-123. Paris : Larousse.
- Diesing, Molly. (1996) *Indefinites*. Cambridge : The MIT Press.
- Dobrovie-Sorin, Carmen. and Claire Beyssade. (2004) *Définir les indéfinis*. Paris : CNRS Éditions.
- Erteschik-Shir, Nomi. (1997) *The Dynamics of Focus Structure*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Furukawa, Naoyo. (1989) Le SN générique et les pronoms *ça* / *il(s)* : sur le statut référentiel des SN génériques. *Modèles Linguistiques* XI(2) : 37-57.
- Galmiche, Michel. (1986) Référence indéfinie, événements, propriétés et pertinence. Jean David and Georges Kleiber (eds.) *Déterminants. Syntaxe et sémantique*, pp. 41-71. Paris : Klincksieck.
- Haiman, John. (1978) Conditionals are Topics. *Language* 54 : 564-589. Baltimore : Waverly Press.
- Hajicová, Eva et als. (eds.) (1998) *Topic-Focus Articulation, Tripartite Structures, and Semantic Content*. Dordrecht / London : Kluwer Academic Publishers.
- Heim, Irene (1982) *The Semantics of Definite and Indefinite Noun Phrases*. Ph. D. Dissertation. Amherst : University of Massachusetts.
- Heyd, Sophie (2002) Prédication et interprétation générique des SN en *des* en position sujet. ms. *Colloque Indéfinis et prédication en français*. Paris : Université de Paris-Sorbonne.
- Karttunen, Lauri. (1976) Discourse Referents. James D. McCawley (ed.) *Notes from the Linguistic Underground. Syntax and Semantics* 8, pp. 363-386. New York : Academic Press.

- Keenan, Elinor O. and Bambi Schieffelin. (1976) Foregrounding Referents. A Reconsideration of Left Dislocation in Discourse. *BLS 2* : 240-257. Berkeley : Berkeley Linguistic Society.
- Léard, Jean-Michel. (1987) Quelques aspects morpho-syntaxiques des syntagmes et des phrases génériques. Georges Kleiber (ed.) *Rencontre(s) avec la généricité*, p.133-156. Paris : Klincksieck.
- Lewis, David. (1975) Scorekeeping in a Language Game. Rainer Bäuerle et als. (eds.) *Semantics from Different Points of View*, pp. 172-187. Berlin : Springer.
- Link, Godehard. (1983) The Logical Analysis of Plurals and Mass Terms. A Lattice-Theoretical Approach. Rainer Bäuerle et als. (eds.) *Meaning, Use and Interpretation of Language*, pp. 303-323. Berlin : de Gruyter.
- Milsark, Gary, L. (1977) Toward an Explanation of Certain Peculiarities of the Existential Construction in English. *Linguistic Analysis 3* : 1-29. New York : Elsevier.
- Muller, Charles. (1999) À propos de l'indéfini générique. Georges Kleiber (ed.) *Rencontre(s) avec la généricité*. Paris : Klincksieck.
- Prince, Gérald. (1985) Thématiser. *Poétique 65* : 425-434. Paris : Le Seuil.
- Reinhart, Tanya. (1981) Pragmatics and Linguistics. An Analysis of Sentence Topics in Pragmatics and Philosophy 1. *Philosophica 27* : 53-94.
- Rooth, Mats. (1985) *Association with Focus*. Ph. D. Dissertation. Amherst : University of Massachusetts.
- Rooth, Mats. (1995) Indefinites, Adverbs of Quantification and Focus Structure. Gregory. N. Carlson et al. (eds.) *The Generic Book*, pp. 265-299. Chicago : The University of Chicago Press.
- Schubert, Lenhart, K. and Francis, J. Pelletier. (1987) Problems in the Representation of the Logical Form of Generics, Plurals, and Mass Nouns. Ernest LePorte (ed.) *New Directions in Semantics*, p 385-451. New York : Academic Press.
- Schubert, Lenhart, K. and Francis J. Pelletier. (1988) An Outlook on Generic Statements. Manfred Krifka (ed.) *Genericity in Natural Language*, pp. 357-372. SNS-Bericht 88-42. Tübingen : University of Tübingen.
- Stalnaker, Robert, C. (1978) Assertion. Peter Cole (ed.) *Pragmatics. Syntax and Semantics 9*, pp. 315-332. New York : Academic Press.
- Strawson, Peter, F. (1964) Identifying Reference and Truth-Values. *Theoria 30(2)* : 96-118.
- Ward, Gregory. and Ellen F. Prince. (1991) On the Topicalization of Indefinites NPs. *Journal of Semantics 16* : 167-177. Oxford : Oxford University Press.
- 久野 暲 (1973) 『日本文法研究』 大修館書店。
- 東郷雄二 (1999) 「談話モデルと指示 - 談話における指示対象の確立と同定をめぐって」 『京都大学総合人間学部紀要』 第 6 巻. 35-46. 京都大学総合人間学部。
- 東郷雄二 (2000) 「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」 『京都大学総合人間学部紀要』 第 7 巻. 27-46. 京都大学総合人間学部。
- 東郷雄二 (2001a) 「定名詞句の指示と対象同定のメカニズム」 『フランス語学研究』 35 号。

1-15. 日本フランス語学会.

東郷雄二 (2001b)「定名詞句の「現場指示的用法」について」『京都大学総合人間学部紀要』第8巻. 1-17. 京都大学総合人間学部.

東郷雄二 (2002)「不定名詞句の指示と談話モデル」『談話処理における照応過程の研究』科学研究費成果報告書. 1-35.

東郷雄二 (2006)「不定名詞句の転位と状況解釈」『フランス語学研究』40号、1-13. 日本フランス語学会.

森香奈絵、東郷雄二 (2004)「des N 主語を持つ総称文と状況解釈」『フランス語学研究』38号、39-45. 日本フランス語学会.

¹ De Fornel (1988)の例。なお例(3) (4) は会話フランス語コーパスから採取された例であるため句読点などは付されていない。

² フランス語には英語にはない不定冠詞の複数形 *des* がある。英語では不定冠詞の複数形は裸複数 (*I bought books.*)か、弱形の *some* (*I bought some books.*)で表される。裸複数名詞には総称の読みもあるので (*Cats are carnivorous.*)、これと区別するため例文の英訳で不定冠詞の複数形に対応する例には%記号を付すことにする。また、フランス語には非可算名詞に付いて若干量を表す部分冠詞 (*du / de la*)がある。英語ではこのような場合、裸単数 (*I drunk wine.*)か、弱形の *some* (*I drunk some wine.*)を用いる。フランス語で部分冠詞が用いられている例に対応する英語訳にも%記号を付す。

³ すぐにわかることだが、主題をこのように定義すると、すべての文は主題を持たなくてはならないことになる。主題がなければ文の真偽値を与えることができないからである。ところが一般に、*A dog came in.* のような文は無題文で主題を持たないとされている。Erteschik-Sirはこの難点を回避するため、無題文にも *stage-topic*「状況主題」があるという興味深い説を提唱しているが、本稿ではこの問題には触れない。

⁴ “*Il n’est pas nécessaire que le « thème » soit un terme défini, ni qu’il représente précisément un objet, ni a fortiori que cet objet soit connu.*” (Muller (1999) : 188)「主題は、定である必要もなければ、厳密にある事物を指している必要もなく、ましてや既知である必要もない」

⁵ 談話指示子 (*discourse referent*)は Karttunen (1976)の用語である。談話モデル理論では、不定表現 (*ex. a dog*) も適切な文中で用いられたときは、談話モデルに談話指示子を設定し、それ以後は定として扱われると考える点で、不定表現を一貫して変数とする形式意味論と立場を異にする。

⁶ この考え方は、断定 (*assertion*)とは可能世界の集合をあるやり方で狭めることであるとする Stalnaker (1978)の考え方に通じるものであり、また Chierchia (1995)が展開する動的意味論 (*dynamic semantics*)が文の意味を真理条件ではなく文脈更新力 (*context change potential*)としているのと基本的に同じ考え方に基づいている。”*Now, our proposal is that the value of sentences be specified in terms of context change potentials, rather than in terms of truth conditions.*” (Chierchia (1995) : 83) Chierchia の言う *context* とは、Stalnaker の *context set* と同じものであり、ある命題と両立可能な可能世界の集合を指す。ただし、談話モデル理論は形式意味論とは異なり、談話を話し手と聞き手とに相対化して把握するため、発話の力は「文脈集合を狭めよ」という指令としてではなく、「あなたの談話モデルをアップデートせよ」という聞き手に対する指令として働くのである。

⁷ ただし、連想照応のケースや、「地球の中心」とか「7から数えて100番目の素数」とか「日本人で現在最高齢の男性」なども定であり、適切な発話では主題として選ばれること

ができるのが、聞き手の談話モデルに登録済みとは考えられないので、この仮説はもう少し修正が必要である。属格や数学的關係や最上級などは、基準となる談話モデルに登録済みの要素（地球、7、日本）からある關係をたどることでアクセスすることができる。しかし、この修正は本稿の主張には直接關係しないので、ここでは無視する。

⁸ 3分構造の詳細については、Heim (1982)、Diesing(1996)などを参照のこと。

⁹ (17)の論理式の制限部に入っている student(x)は述語なので、これを集合に変えるにはラムダ変換 (lambda conversion)を施さなくてはならないのだが、本稿の目標は形式意味論の厳密化ではないので、煩瑣になるのを避けるためにこのように表記しておく。

¹⁰ 制限部が主題であることは Hajicová et al. (1998)で述べられている。

¹¹ 不定名詞句と述語による定位操作については東郷(2002)を参照のこと。

¹² (20 b)の論理式は原文ではフランス語の単語を用いて書かれているが、読者の便宜のために英語の単語に置き換えた。

¹³ f(e)はスコーレム関数 (Skolem function)によって得られるスコーレム項 (Skolem term)であるが、詳細は省略する。

¹⁴ 英語の総称文で主語に付く限定詞は、不定冠詞単数、定冠詞単数、および無冠詞（裸複数）なので、(21 c)の英訳には対応する冠詞がない。

¹⁵ 不定冠詞複数 des と部分冠詞 du の意味の歴史的変遷については、Carlier(2001)が詳しい。

¹⁶ ここでは(29)は個体集合への量化とする分析を採用したが、異なる分析も可能だと考えられ。たとえば(29 b)に B グループと同じ状況量化の分析を施すことは可能である。

GEN [$\lambda s \exists x[\text{country}(x) \wedge \text{neighbor}(x, s)]$] [$\lambda s \exists x[\text{country}(x) \wedge \text{neighbor}(x, s) \wedge$
have-difficult-relations(x, s)]

¹⁷ フランス語の中性代名詞 en には、不特定の直接目的語を受けるという働きがある。

Avez-vous des frères ? — Oui, j'en ai. (Do you have brothers? — Yes, I have.) 「男の兄弟はおありですか」「ええ、おります」では、en は des frères (brothers)を受けている。フランス語では代名詞は省略できないので、en の使用は必須である。

¹⁸ J'ai acheté un gâteau et je l'ai mangé. (I bought a cake and I ate it.) 「私はケーキを買ってそれを食べた」のように、第2文でケーキを受ける代名詞に人称代名詞 le を用いると、「そのケーキを全部食べた」という意味になる。第2文で en を用いて et j'en ai mangé. (and I ate a part of it).とすると、ケーキを全部ではなく、一部を食べたという意味になる。代名詞 en は〈前置詞 de + 名詞〉の代理をし、前置詞 de にはもともと部分を表す意味があるので、代名詞 en にも部分を表す意味があると考えられている。